

スヌーズレンにおける触覚刺激の重要性とその意義について —ISNA(国際スヌーズレン協会)創設者たちの思想と実践の検討を中心に—

姉崎 弘

九州女子大学 人間科学部 児童・幼児教育学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2024年10月23日受付、2024年12月19日受理)

要 旨

スヌーズレンでは、一般的に対象者のリラクゼーションや反応を引出すことをねらいとして、視覚刺激や聴覚刺激、嗅覚刺激等を用いた心地よい多重感覚環境が用いられるが、触覚刺激を用いた実践についてはほとんど論じられていない。そこで本稿では、ISNA(国際スヌーズレン協会)を設立した創設者たちの触覚刺激に関する思想と実践を踏まえ、その他の研究知見に基づいて考察し、触覚刺激の重要性とその意義、さらに今後の課題を検討した。

キーワード：スヌーズレン、MSE、触覚刺激、ISNA 創設者、思想と実践

1. はじめに

オランダで始められたスヌーズレン (Snoezelen) がわが国に初めて紹介されてから約 35 年になる。当初スヌーズレンは、主にリラクゼーションを促すレクリエーション活動の一つと考えられてきた (鈴木, 2002) が、その後、K.Mertens(2003) や姉崎の研究 (2013)、さらに ISNA-MSE(国際スヌーズレン—多重感覚環境協会) によるスヌーズレンの定義や概念の整理がなされ (M.Eijgen daal etc, 2010)、今日では、スヌーズレンは、主にレクリエーションあるいはレジャー、セラピー、教育、療育等の分野に適用され実践されている。なお、今日、イギリス等の英語圏では、Snoezelen に代えて、MSE(Multisensory Environment: 多重感覚環境) の用語が多く用いられているが、両者は同義語とされている (Pagliano, P, 2017)。そのため本稿では「スヌーズレン」の用語を用いる。

筆者は 1994 年に肢体不自由養護学校で光刺激と聴覚刺激を併用した空間を教室内に創出して重度・重複障がい児の反応を引出し、相互に共感し合う、という今日のスヌーズレン活動をすでに実践していた。2013 年に、それまでのスヌーズレン研究の成果を踏まえて、国内外の学校教育においてこれまで提唱されてこなかった「スヌーズレン教育」を新たに定義し、2023 年に再度定義を行った (姉崎, 2013; 姉崎, 2023)。特に障害のある子どもたちに有用な指導法の一つとして、学校の教育課程上は、主に自立活動や特別活動の指導法に位置付けることが可能であるとして提案した。これまで、特別支援学校などでは、教室内に、バブルチューブ、サイドグロウ、アロマオイル、リラクゼーション音楽等を用いて、心地よい多重感覚環境を設定し、その中でリラクゼーションを促したり、あるいはさまざまな主体的な反応を引出したりして、相互にコミュニケーションを深め合ったりする、「スヌーズレン教育」が、特別支援学校 (姉崎, 2003; 姉崎, 2013) や通常学校 (東・姉崎, 2018) 等で実践され、さまざまな成果や効果が報告されてきた。

しかしこのようにわが国のスヌーズレンの実践では、感覚刺激として、視覚刺激や聴覚刺激、嗅覚刺激が主に使用されてきたのに対して、一方触覚刺激に関しては、その実践例がほとんどなく、Cinii で「スヌーズレン 触覚刺激」の 2 つの用語をキーワードに 2024 年 9 月に検索しても文献が全くヒットしなかった。したがって、わが国では、スヌーズレンにおける触覚刺激を用いた実践についてはこれまであまり重視されてこなかったように思われる。触覚刺激の教具も市販されているが、どちらかと言えば、主流は前述したバブルチューブやサイドグロウ、リラクゼーションミュージック、アロマオイル等を用いた視覚刺激や聴覚刺激、嗅覚刺激が中心になっていると推察される。この理由の一つとして、バブルチューブやサイドグロウ、リラクゼーションミュージック等の創出する感覚環境は、人に魅力的で、人の情動に強く働きかける、スヌーズレンを特徴づける代表的な環境といえるからである。

そこで本稿では、方法として、触覚刺激に視点を当てて、2002 年に世界の ISNA(国際スヌーズレン協会)

を設立した共同設立者である A.Verheul と K.Mertens の二人のスヌーズレンの著書の中で、触覚刺激に関する思想や実践を主に取り上げて、他の知見も踏まえて考察を行うことで、スヌーズレン実践における触覚刺激の重要性やその意義、今後の課題について検討することを目的とする。

II. 結 果

1. ISNA 創始者たちによる触覚刺激に関する思想と実践

(1) スヌーズレン創始者たち Y.Hulsegge & A.Verheul の二人の触覚刺激に関する思想と実践

始めに、スヌーズレンの創始者たちは、Y.Hulsegge と A.Verheul の 2 名であり、他方 ISNA(International Snoezelen Association: 国際スヌーズレン協会)の創設者たちは、A.verheul と K.Mertens の 2 名である。本稿では、この ISNA を創設した、世界のスヌーズレンのエキスパートである A.verheul と K.Mertens の 2 名のそれぞれの著書の内容を中心に考察したいと考える。

まず、スヌーズレン創始者たちの著書 “Snoezelen another world”(ROMPA 1987)の訳書— 姉崎 弘 監訳『重度知的障がい者のこころよい時間と空間を創るスヌーズレンの世界』(福村出版 2015 年)を手がかりとして以下に述べる。ちなみに、二人の創始者たちは、オランダ人で、当時スヌーズレンの発祥の地である De Hartenberg Centre の大きな入所型知的障がい者施設の指導員である(以下、p.60 より引用する)。

「触覚の側面は、知的障がい者の生活において、重要な役割を演じている。赤ちゃんは、触覚によって自分の体とその環境を探索する。重度知的障がいのある子どもたちにも、この行動を見ることができる。すなわち、彼らは、自分の手と口を使って、ありとあらゆる物を感じとる。身体にはたくさんの可能性がある。愛撫する。ひざに座る。触り心地のいい人形や物で遊ぶ。動物や自然の素材を触ったり、家の中の家具(椅子、カーテン、タオル)などに触れる。粘土、パン生地、水のような素材で遊ぶ。入所者にスピーカーや楽器を触らせて振動するものを体験させる。熱さと寒さ(水、空気)を感じさせる。運動の経験(揺れること、滑ることなど)もさせる。」

<いろいろな触覚物(以下、p.78 より引用する)に関する説明>

「柔らかな敷物または羊皮を、床の上に置くことができる。その上で、丸くなるか、あるいは、その上でただ横になることができる。床の高さの違いも、ワクワクさせる変化をもたらしてくれる。柔らかい表面も固い表面もいずれも、このためには申し分なく適している。天井から吊り下げる触覚物は、人が触れる可能性が高くなるものである。たとえば、綿、または砂、米、小石、ピンポン・ボール、おがくず、羽毛、ポリスチレン・ペレットなどが詰まった木綿かキャンパス地の袋を使用することである。しかし吸収力のある素材に注意する必要がある。その状況と使い方で、袋の中身は決まる。強い匂いのするハーブの使用または芳香性のある材料を加えることを勧める。デザインも、ここでは 1 つの役割を果たす。シリンダー状のバッグは最も扱いやすい。これらはあまり大きくてはいけない。砂袋のように重くなってしまう。涙のしずくのような形の物も、無限の可能性を提供する。これらは強いバネで吊り下げることができる。そして麻のひもをその側面に取り付ければ、詰め物でできた触覚物になる。」

以下は、主な自作の触覚教具の名称である。創始者たちは多くの自作教具を製作して実践に用いている。一つひとつその名称と使い方を写真も添えて丁寧に説明もしている。

以下は、代表的な触覚教具・教材の各名称とその若干の補足説明である。(pp.81 ~ 184 より引用する。)

「触覚の壁」・・・ほとんどの触覚物は、壁のできるだけ低いところに取り付けるのが最もいい。

「電子機器と触覚物」

「触覚物の温度と照明効果」

「光で照明された床」

「触る感覚としての温風と冷風」

「通風道<風の通るトンネル>」

「触覚素材に匂いを結び付ける」

「触れる教材」

「触覚の板」

「触れるカーテン」

「触覚の箱」

「触覚立方体」

「人形と可愛いオモチャ」

「ネックレス」

「音響ラック」

「鈴付き手袋」・・・手の簡単な動きでチリンチリンという美しい音がかもし出せる。

「振動する箱」・・・静かに振動する教材は触れたいという気持ちにさせる。

(筆者によるまとめ)

・触覚は、赤ちゃんや知的障がい者においては、手や口を使って、外界にあるありとあらゆる物を感じ取っていて、彼らの成長発達に不可欠な感覚といえる。触り心地のよい素材は多くある。素材のもつ表面の硬さや柔らかさも感じ取れる。市販されている素材や材料を使って、対象者のニーズに応じた各種触覚の教材・教具を自作で製作することができる。創始者たちは、触覚を刺激するさまざまな素材を見つけ出して教材・教具としてそれらを積極的に知的障がい者たち(重度の知的障がい者を含む)に活用し、手作りの触覚教具も多数製作していった。

(2) スヌーズレン研究の第一人者とされるドイツの K.Mertens の思想と実践

K.Mertens の著書 “Eine Einführung in die Praxis”. Verlag modernes lernen -Dortmund (2003) の訳書 姉崎 弘監訳 マティーアス・アンデルス訳 スヌーズレンの基礎理論と実際―心を癒す多重感覚環境の世界(第2版 復刻版)―. 学術研究出版 2015 年を手がかりとして、以下に述べる。ちなみに、K.Mertens は、スヌーズレン創始者の一人 A.Verheul と共に ISNA(国際スヌーズレン協会)を設立した元ドイツ・フンボルト大学の教授である。

「触れる」に関して、まず学術的に触覚の概要について述べている(以下、pp.14～15 より引用する)。
「皮膚は、約 2㎡の表面積があり、人間のもつ最大の感覚器官である。接触と圧力によって、情報が機械的触受容器、温熱的触受容器、さらに侵害的触受容器に伝達され、それが圧力や牽引、温度、痛みとして感じられるのである。接触はさまざまな速さや強さで伝達される。特に敏感なのは、指先、手のひら、唇、舌、鼻、頬、額である。温熱的触受容器は皮膚のさまざまな場所に配置されていて、冷たさと温かさの質を感じ分けられる。冷感点の方が温感点よりもはるかに多い。皮膚温度が変化する間に生じる温度感覚は、およそ 3 つのパラメータによって決定される。それは①皮膚のもともとの温度、②温度変化の速度、③刺激を受ける皮膚面積の広さ、の 3 つである。温熱刺激の認知と、それに付随する自律神経性の反応は情緒的效果がある。それは楽しくさせるものにも、あるいは楽しさを喪失させるものにもなる。」

スヌーズレンルームは、一般に休息とリラクゼーションを促し、そして注意を集中させるための環境を提供する (p.34) と言われる。

そしてスヌーズレン全体の実践は、以下の 20 の単元に分けられる (pp.35～41 より引用)。各単元の内容の説明を以下に示す。ただし、以下、下線は筆者による。

第 1 単元 スヌーズレンの部屋に慣れる

第 2 単元 部屋を探検する

第 3 単元 バブルチューブの効果を体験する

第 4 単元 触ったり触られたりする

第 5 単元 用具(小物)を見つけて音源として使う

第 6 単元 写真やスライドの画像を使って想像力を養う

第 7 単元 音を使って想像力を養う

第 8 単元 嗅ぐことと味わうことで想像力を養う

第 9 単元 視覚的な刺激をリズムと音に結びつける

- 第10 単元 光と音の瞑想
 第11 単元 海中物語を体験する
 第12 単元 集中する
 第13 単元 思い出す
 第14 単元 息(呼吸)
 第15 単元 深いリラクゼーション
 第16 単元 動物と親しくなる
 第17 単元 安心を見つける
 第18 単元 プロジェクト「オリエント」
 第19 単元 パーティーとお祭りとお祝い
 第20 単元 リラクゼーション・スヌーズレン

上記の単元の中で、唯一、第4単元「触ったり触られたりする」に、触覚刺激を用いた実践について取り上げられている(pp.88-95)。また他の単元の中でも必要に応じて、触覚を用いた活動に触れている。

目的：・皮膚を感覚的に刺激する

- ・無意識的に、そして意識的に触覚刺激を体験する
- ・音を聴いて認識する
- ・音楽のリズムと音量に応じて動く
- ・身体図式の感覚を養う
 - ・相手と親しくなる
- ・用具(小物)の手触りを感じる
- ・リラックスする

(触覚指導の実践の展開例)

実践の展開例を、「段階・時間」「教授方法の目的」「内容」「準備・用具・音楽」ごとに整理して述べている(以下、pp.61-64)。

段階 時間	教授方法の目的	内 容	準備・用具・音楽
I：約15分	ボールマッサージで心地よさを引出す。 体の心地よいところと心地よくないところを体験する。 相手と親しくなり、相手を思いやることを学ぶ。	参加者はうつ伏せになり、指導者はそばに正座する。 ボールをゆっくり背中とお尻と足と腕の上に転がす。ボールの圧力を変える。足の裏まで転がし、戻り、お尻と背中を経て、首まで転がす。そしてボールを腕に沿って手まで、そして肩を経て他の体の部分へ転がす。 お互いに交代して、違うボールを使って練習を繰り返す。	ペアの変更。 半袖の薄着。 トゲ付きゴムボール、柔らかいボール、木製のボール、積極的なBGM。
約5分	横になった参加者は、身体接触の強弱の加減を調節する。	ボールを体の全体に転がした後、参加者は集中的にマッサージする身体の部分を決める。	上記と同じ。
II：約25分	さまざまな材質の用具(小物)を試したり、体験したりする。 相手に対する思いやりと配慮は基本条件である。相手を傷つけやすい子どもは大人が監督しなければならない。	もう1回相手はうつ伏せになり、そして仰向けにもなる。さまざまな用具(小物)を使って、相手を触ったり、撫でたり、突いたり、柔らかく突いたりする。相手を傷つけないように注意する。特に、目・鼻・耳。	ペア(相手)の変更。 ペアごとに好きな材質や用具を用いる。石、柔らかいボール、ブラシ、筆、羽。 相手を変更して繰り返す。 安らかな音楽で。

約5分	その人にとって、一番心地よい用具(小物)を見つける。	相手は全部の用具(小物)でマッサージを受けた後、一番良かった物を選ぶ。この用具でもう一度体の好きなところのマッサージを受ける。	ペアの変更。
Ⅲ:約5分	さまざまな材質を体験したら、1つの用具に集中する。参加者にとって使いやすいので、特に柔らかいボールが良い。(子どもは相手を攻撃的に叩かないように注意する)。	ペアは、前後に並び、後ろの人は前の人の背中を柔らかいボールで上から下、右から左へ叩く。その際、脊椎と腎臓は叩かないようにする。相手を変更し、この練習を繰り返す。	ペアの変更。 柔らかいボール(40cmの竹の杖の先にスポンジボールが付いている)トゲ付きゴムボール、柔らかいボール。
約5分	相手の気持ちの理解と思いやりが必要である。相手を叩く適当な力を理解する。	指導者は背中叩くところと叩き方を指導する。	同じ物。
約15分	太鼓の拍子の音に合わせて叩く。とても集中しなければならない。叩かれる相手も拍子の音が聞こえるので、状況に親しみやすい。拍子のリズムを急激には変化させない。	指導者・教師は、太鼓の拍子をとる。この拍子に合わせて相手の背中を叩く。太鼓の音量の大きさは、叩く力の大きさの程度を示す。相手を変更し練習を繰り返す。	同じ物。 指導者は太鼓を担当する。
Ⅳ:約10分	相手の希望するとおりにマッサージをする。体の部分を口で言いながら身体図式と身体意識を養う。 相手の体を傷つけないように注意する。 練習を終える時は、刺激を小さくしつつも体を撫でるようにする。	相手は叩かれたり突いたりされる体の部分を口に出して言う。例えば、首・背中・大腿部・頬。叩く力の大きさについても言う。 マッサージが終わったら、相手の体全体を布で覆うように両手で広く撫でる。背中・腕・足を撫でる。	ペアで行う。 相手はうつ伏せの姿勢。 1個、2個の柔らかいボール。
約5分	前の練習は休息を必要とする。参加者はリラックスし、マッサージによる接触後の効果を感じる。	リラクゼーションの音楽。	

(筆者によるまとめ)

- ・触覚に関する学術的な解説は、受講者にとって触覚の基本を理解する上での必須内容として理解される。
- ・スヌーズレンの資格取得を想定して、人間の五感を刺激するスヌーズレン実践全体の内容を20の単元に整理した。
- ・人の皮膚を刺激するさまざまな材質の小物が用意されていた。
- ・その中で、触覚に関する単元を上記プログラムの上位4番目に位置付けている。
- ・相手の気持ちの理解や思いやりの大切さ、共感的理解が重視されている。
- ・相手の体を傷つけないように、細心の注意が払われていた。

Ⅲ. 考 察

1. オランダの創始者たち Y.Hulsegge & A.Verheul の触覚刺激に関する思想と実践

知的障がい者や重度知的障がい者の生活において、触覚は大変重要な役割を演じていることを指摘している。そして赤ん坊は、触覚によって自分の体とその周りの環境を探究しており、重度知的障がいのある子どもたちにもこのような行動が見られると述べている。

創始者たちは、人間の触覚を刺激することのできる身近にある素材を用いた各種教材・教具づくりの多くのヒントを提供してくれている。実際に、創始者たちは自らもさまざまな触覚刺激の教材・教具を製作して実践している。この創始者たちの姿勢は、私たちにも、自作による教材・教具づくりの必要性や可能性・有効性を示唆するものとして、注目される。

そこには、実践しながら、人にとって心地よい触覚刺激を生活や自然の中にも深く探究して見出していった実践研究者としての厳しい姿勢が貫かれていると考えられる。実際に、今日多くの施設や学校等で活用されているスヌーズレン器材や用具は、創始者たちの長年にわたる試行錯誤の探究の結果として開発されたものであり、今日私たちはその遺産を継承していると考えられる。

2. ドイツ・フンボルト大学の K.Mertens の触覚刺激に関する思想と実践

K.Mertens は、大学のリハビリテーション学部の教授として、触覚刺激等について学術的および実践的にも考察を行い、さらにそこからスヌーズレンの国際的な資格取得のプログラムを世界で最初に創った人物である。このプログラムは全体が 20 の単元からなるが、第 4 単元に「触ったり触られたりする」という触覚刺激に関する単元を取り扱っている。

この触覚に関する単元の目的として、「皮膚を感覚的に刺激する」「触覚刺激を体験する」「身体図式の感覚を養う」「用具(小物)の手触りを感じる」「リラックスする」など、計 8 つの目的を設定し、教授する段階ごとの時間配分、目的や内容、準備として用いる小物の用具や使用する音楽について記し、初心者にも、実践の仕方や準備物等をわかりやすく詳述している。

触覚刺激にも多々あり、特に、刺激を受ける時の利用者の姿勢や、小物で体を適度に叩く時の刺激の力加減や体を傷つけないようにするための注意点について指摘すると共に、利用者が自分の一番好む触覚刺激の材質や叩かれる時の部位、そして力加減を選択し決められるように配慮されている。ここで、叩く触覚刺激とあるが、ソフトに触る触覚刺激もあるが、ここでは主に小物の用具を用いて、例えば背中を叩く、といったマッサージ効果も期待されるような触覚刺激の使用法について主に述べている。

このプログラムでは、自分の最も好む触覚刺激の種類や材質、叩かれる部位とちょうどいい触り加減や力加減を利用者が自ら見出していくところが重視されている。このようにすることで、後で、自分の最も好む触覚刺激とその刺激の方法を理解して、その刺激の仕方を、実践する人に伝えることができると考えられる。このことは、本人にとって、心地よい環境を設定していく上で不可欠なポイントといえる。また特に、相手の気持ちの理解や思いやりの心の大切さ、そして共感的理解が重視されていた。

3. スヌーズレンにおける触覚刺激の重要性とその意義について

触覚は、人が生きていく上でなくてはならない重要な感覚の一つである。特に触覚刺激は、例えば、赤ん坊が母親の胸に抱かれて、肌や服の上から接触している部位の皮膚刺激の感覚を通して、母親の体の温かさやぬくもりを感じたり、母親の優しい声かけを受けて、情緒的に安心した安らかな気持ちで過ごすことができるようになり、赤ん坊の成長・発達を促す上で大変重要である。このことは、知的障がい者、特に重度および重度・重複障がい者などにおいても同様に言えることであると考えられる。

以下は、山本洋紀著「触覚は視覚や聴覚に影響し「情動」を刺激する」(healthist.net/biology/1560/ 参照日 2024 年 10 月 5 日)を主に参考にした。先行研究によると、ペットをなでると気分が落ち着き、見るだけでも癒されるようになる。これは、触覚と視覚が刺激し合い、脳で感じるようになるからで、触覚と視覚が相互に刺激し合い、脳で感じるようになるからで、このように触覚には情動を刺激する要素があると考えられる。また触覚は、他の感覚・知覚に比べて人が早い段階で獲得できるものであるという。

また別な研究によると、新生児に振動刺激を与えたり、何かを見せたり、音を聞かせたりするという知覚の実験では、他の刺激に比べて、触覚刺激の時に非常に広い範囲で脳が活動するという結果が出ているという。成人では脳の約 1/3 が視覚野とされている。触覚はそれよりも随分少ないが、前述の実験結果から見ると、新生児の間は触覚が優位になる。また成人では、右手の刺激は左脳、左手の刺激は右脳が反応するが、新生児の場合は片方の手への刺激で、左右両方の脳が活動するという。これらのことから、新生児の頃は触覚の

刺激が知覚の多くの部分を占めていると考えられる。このように、五感の中で、触覚による知覚が人の成長の最も早い時期から活動していることから、スヌーズレン環境の中でも、特に触覚刺激の活用が、新生児についてばかりでなく、発達初期にあたる重度の障がい児に対しても、外界の知覚を広め深める上でも重要であることが示唆される。

またスヌーズレンにおける触覚刺激の意義として、新生児において、触覚刺激が知覚の多くを占めるという知見から、スヌーズレンの多重感覚環境の中では、これまであまり注目されてこなかった触覚刺激を中心にして、視覚刺激や聴覚刺激、嗅覚刺激などの諸刺激を重度の障がい児者等にできるだけ不快に感じられないように、できれば心地よい刺激として提供できた方が、脳の広範囲をよりポジティブに活発化することが予測され、よりよい発達を促すのではないかと考えられる。ここに触覚刺激の意義があると考えられる。

これまでわが国のスヌーズレンでは、主に視覚刺激や聴覚刺激、嗅覚刺激等を活用した環境づくりが重視されてきたが、今後は触覚刺激の教材・教具を積極的に導入して、心地よく手や体で物や人に触れるという触覚を用いた活動を主に進めながら、同時に視覚刺激や聴覚刺激等が創出する、心地よさを感じられる環境を楽しむ取組みが有効ではないかと考えられる。この検証は今後の課題である。

IV. まとめと今後の課題

本稿では、これまであまり注目されてこなかった「触覚刺激」に焦点を当てて、用いた文献数としては決して多くはないが、基本文献である ISNA 創設者たちによる「触覚刺激」についての著書の要点をまとめ、またその他の資料も参考にして、今後のスヌーズレン実践のあり方に示唆を与えるものを考察した。ISNA の創設者たちは、それぞれ触覚刺激の重要性を認識して、さまざまな触覚刺激の教材・教具を自ら製作して実践したり、スヌーズレンの資格認定プログラムの中に触覚刺激の指導内容を組み込み、指導上の重要な留意点、たとえば共感的理解の大切さ等についても指摘していた。

人が心地よいと感じる触覚刺激は、人の心を安らぎに包まれた至福の時を提供してくれると考えられるが、他方では、使い方によっては、時に、不快に感じられる触覚刺激は、人の気持ちを苛立たせ、人に不安や恐怖心をもたらすこともあるだけに、その使用には、細心の注意が必要とされることが考えられる。スヌーズレンでは、あくまでも、人の気持ちを不快にさせない、心地よい触れ方や刺激の仕方が求められているといえる。

今後の課題として、どのような触覚刺激が、あるいは触覚刺激と同時に併用する視覚・聴覚刺激等を用いて創出されるどのようなスヌーズレンの多重感覚環境が、人に心地よいと感じられるのかを、実際に実験や調査を行うことで検討していく必要がある。

引用・参考文献・サイト

1. 姉崎 弘・重症心身障害児教育におけるスヌーズレンの有効性について―肢体不自由養護学校の自立活動の指導に適用して―. 日本重症心身障害学会誌, 28(1)(2003)93-98.
2. 姉崎 弘・わが国におけるスヌーズレン教育の導入の意義と展開. 特殊教育学研究, 51(4)(2013)369-379.
3. 姉崎 弘・「スヌーズレン (MSE) 教育」の再定義とその留意点について. スヌーズレン教育・福祉研究, 6, (2023)18-27.
4. Eijgendaal.M.,Eijgendaal.A.,Fornes.S.,Hulsegge.J.E.,Mertens.K., Pagliano.P.,Rowe.J., Verheul.A.,Vogtle.L.K. (2010)Multisensory Environment(MSE/Snoezelen)-A Definition and Guidelines,1-18 (<https://www.isna-mse.org/assets/mse-position-paper-idea-forum.2010vs1.pdf>) 参照日:2024年7月10日)
5. 東 法子・姉崎 弘・児童の気持ちの変容からみるスヌーズレンの授業の教育的意義―小学校の通級指導教室での実践を通して―. スヌーズレン教育・福祉研究, 2,(2018)42-51.
6. Y.Hulsegge. & A.Verheul. "Snoezelen another world". ROMPA. 1987年 姉崎 弘監訳『重度知的障がい者のこころよい時間と空間を創るスヌーズレンの世界』.(2015) 福村出版(東京).
7. Mertens.K. "Eine Einführung in die Praxis". Verlag modernes lernen -Dortmund (2003) 姉崎 弘

- 監訳 マティーアス・アンデルス訳 『スヌーズレンの基礎理論と実際－心を癒す多重感覚環境の世界 (第2版 復刻版)』 一.(2015) 学術研究出版 (東京)
8. Pagliano.P. Multisensory Environment and Snoezelen. スヌーズレン教育・福祉研究,1,(2017)15-18.
 9. 鈴木清子. 最重度の知的障害を持つ人たちの主体的な活動－スヌーズレンの余暇活動としての可能性. 作業療法,21(特別号),(2002)83.
 10. 山本洋紀. 触覚は視覚や聴覚に影響し「情動」を刺激する. <http://healthist.net/biology/1560/> 参照日: 2024年10月20日.

**The Importance and Significance of Tactile Stimulation in Snoezelen
– A Focus on the Thought and Practice of the International Snoezelen Association (ISNA)
Founders –**

Hiroshi ANEZAKI

Department of Early Childhood and Elementary Education, Faculty of Humanities,

Kyushu Women's University

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

In general, the goal of the Snoezelen system is to draw out relaxation and induce a reaction amongst a target audience. Though past research posits a comfortable multisensory environment utilizing visual, auditory, and olfactory stimulation, there has been virtually no deliberation on actual implementation of tactile stimulation. This paper examines the thought and practice of the International Snoezelen Association (ISNA) founders as pertains to tactile stimulation. I also considered other research perspectives, the importance and significance of tactile stimulation, as well as potential future issues.

Key words : Snoezelen, Multisensory Environment, Sense of touch stimulation, ISNA founder,
Thought and practice